

特集／途上国研究のための研究ツール―新・旧書誌情報を活用する

特集にあたって

高橋宗生

ここ一〇年余りの間に生じたインターネ

ットの急速な普及と浸透により、図書館の資料情報サービスは大きな変化を経験した。

カード目録からインターネット・OPACへの移行、電子ジャーナルの購読、デジタル・アーカイブズの公開、メールによるアラートサービスの普及などは、一九九〇年代前半までは想像すら難しかった図書館サービスの進化であった。この間、文献検索方法と研究ツールは大きく変貌した。限られた経験ではあるが過去を振り返り、現在の図書館と研究者の関係を考えたい。

●一九七〇～八〇年代の文献検索

一九七〇年代の後半、アジ研図書館ではカード目録の作成が行われていたが、和書は手書き、洋書は手動か導入されたばかりの電動タイプライターで打っていた。カードは薄手と厚手のカードの間にカーボン紙を敷いて複製用と事務用を作成していた。当時機械化されていた分野と言えば、IBMの情報検索用ソフトを用いて、米国議会図書館（以下LC）の機械可読目録（MARC）データベースを選書用に利用してい

たことぐらいであった。

発展途上国に対する関心は一九八〇年代に入ると急速に高まっていき、八〇年に六七七件だった主要レファレンス件数は、八九年には二四七四件に急増した。しかし、回答に使うツールはカード目録や文献の所在を示した冊子体目録が中心であった。蔵書が増えるにつれて高くなったカードボックスの上には、LCや欧米の図書館が発行する数巻にわたる分厚い所蔵目録、加えて、これも数巻または十数巻からなる百科事典、出版目録、人名録、更には投資法、会社法関係の差し替え図書などの参考図書が並べであった。データベース検索が一部に限られた状況では、これらのツールと地域担当レファレンサーの知識が頼りであった。

●電子化する文献情報誌

IT技術が一九九〇年代に急速な進歩を遂げる前、アジ研図書館が力を注いでいたのが、蔵書目録、総合目録、主題書誌、文献解題などの書誌の編纂であった。本特集の最後に収録したリストにみられる様々な文献目録・解題は、研究活動を支える一つ

のインフラとしての役割を担い、研究者が膨大な資料の中から必要なものを探すチェックリストとしても機能した。ただし、偏向がなく包括的で、長年にわたって定期的に発行が行われた文献情報誌はそう多くはない。ここでは筆者自身が関わりを持った三つの文献情報誌をみていきたい。

今年解散する経済資料協議会（一九五一年発足）は、『経済学文献季報』をとおして一九五六年から二〇〇一年の長きにわたって内外の経済学関連文献情報を提供し続けた。第一七六／一七七号まで続いた同誌は、経済学文献に関しては最も網羅的で速報性を持った雑誌であった。各文献は一六主題の大分類の下、多いものでは二六主題にまで分類され、研究分野の拡大に対応していた。一九八〇年代の一時期、アジ研分の採録を担当する一人であったが、主題分類の多さには苦勞した覚えがある。同誌は一九八三年から電算機印刷システムに移行し、九二年からは年二回の刊行と学術情報センター（現国立情報学研究所）との協同によるオンライン・サービスの二本立てで書誌情報を提供し続けた。最終号の終刊の

辞には「：情報メディアが激変するなかで冊子体形式の索引誌はいよいよその役割を閉じる時がきました」と記されているが、数十の図書館による四五五年間の共同編纂事業からは現在も学ぶべきことが多い。

次に、アジア図書館が一九五九年から八年まで刊行した『アジア経済資料月報』を取り上げたい。同誌は地域・国別に分類された雑誌記事索引と受入図書資料を柱に、近着文献紹介、受入統計資料（四半期ごと）、特集（文献目録・解題・展望、資料事情報告、他）などを掲載してきた。和雑誌記事に関しては一九七九年分まで年一度まとめ掲載していたが、八〇年からは『発展途上地域日本語文献目録』に吸収された。同誌は発展途上地域研究の専門的月刊書誌として、海外の研究機関や図書館でも選書源として使われていた。利用者が同誌に掲載された書誌データを切り抜いて閲覧カウンターに提示し、係員が閉架式だった市谷時代の書庫から資料を取り出す、といった風景によく遭遇した。特集記事の総点数は二九四点に及び、内外の研究者に活用された。しかし同誌もインターネットで提供する各月の新着図書と雑誌記事索引のリストにその役割を譲ることになり、四〇年にわたる歴史を閉じた。

オランダの王立言語地理民族学研究所（KITLV）が一九七〇年以降発行している *Excerpta Indonesica* は、インドネシア地域研究に欠かすことのできない文献抄

録誌である。同誌は関連図書だけではなく、二〇〇誌を超す主要学術誌に掲載された論文や単行書の章別索引も掲載し、各々に詳しい解説文と件名を付して利用に供してきた。同誌は二〇〇二年をもって刊行を中止し、その後はインターネット版をウェブ上に流している。一号から六〇号（一九七〇～九九九年分）までは、CD-ROM版でも販売しており、多種にわたる検索が可能になった。

●拡大する電子ツール

これまでみてきたように、冊子体形式の文献情報誌は次々と姿を消し、デジタル・データベースへと変容しつつある。これは単行書の形態をとる文献目録や解題についてもいえる。アジア図書館の蔵書のみを対象に、検索画面の件名の項目に *Full text* と入力して一年間の平均出版タイトル数を調べてみると、一九六〇年代が四三、七〇年代九四、八〇年代七五、九〇年代五七、二〇〇〇年代一九、と七〇、八〇年代をピークに年代を経るごとに点数が減少する。一九九〇年代を年ごとに見ると、九二～九六年にかけて六〇台以上だったのが、九七～九九年には四〇台へと落ち込んでおり、インターネットの普及と反比例していることがわかる。

デジタル化の潮流は文献検索のツールだけに限られたことではなく、百科事典、統計データ、法律・法令、新聞・雑誌の分

野にも及んでいる。様々な検索・編集ソフトを用いて必要な部分を蓄積することで、独自のアーカイブズを持つ研究者はますます増加すると予想される。

本特集は、紙ベースからデジタルベースへと図書館の資料情報サービスの媒体が移行する中、これまで地域研究を支えてきた書誌を中心とする研究ツールを再評価し、著しく利便化した今日の研究ツールとの違いを探ると同時に、これからの「研究者＝ライブラリアン」関係を考察・展望することを目的としている。冊子体形式の目録・解題類には、インターネットでは検索できない文献情報が数多く盛り込まれており、俯瞰性も高い。一方、本特集に収録した多くの論考が指摘するように、最近では隅々まで検索可能なウェブサイトやCD-ROMが次々と出現し、研究者とライブラリアンが互いにその内容と質をみきわめることが必要となっている。

十分かつ良質な資料に裏づけられた研究成果の発表をするには、冊子体だけでなく電子媒体を含む充実した研究ツールの整備と編纂が不可欠である。研究者とライブラリアンがその各々の目標を達成すべく、常々研究情報と資料情報を交換し合い、切磋琢磨することの重要性は今後も変わらないと思われる。

（たかはし むねお／アジア経済研究所 図書館）